

甚作の野上歌

明治19年(1886年) ~ 昭和20年(1945年)



大正から昭和にかけて、「島影」という短歌を載せる雑誌の中心となって活動し、この地域の短歌の向上発展に尽した人である。外内島に生まれ、庄内中学校(鶴岡南高校)三年終了後農業に従事し、このころから文学に親しみ、特に短歌にひかれ作歌をはじめた。大正十一年に歌集『耕人』を発表、その後『郷土礼讃』『停雲』など次々と歌集を発表し、農村歌人として広く知られるようになった。

一方、庄内に生まれ育った数多くの歌人や俳人の研究発掘を進め紹介した。齋村(今の鶴岡市齋地区)の村長を長く務め政治の上でも重要な役割を果たした。昭和十八年開拓団長として満州(中国東北部)に渡ったが、終戦直前に六十才で没した。

明治十九年

東田川郡齋村外内島(現鶴岡市)の農家に生まれる。

昭和十七年

も多くの事績を残す。

若いころから文学に親しむ。

明治四十年

この頃から農事のかたわら作歌活動を始め、農村青年を啓蒙する。

昭和十八年

山形県歌人会の結成とともに委員に選ばれる。一切の公職を辞し開拓団長となって満州に渡る。

大正六年

機関誌「島影」を発行。歌集『耕人』を刊行。

昭和二十年

終戦直前ソ連軍の侵攻に遭って戦死した。

昭和三年

四十三才のとき齋村の村長に推されて耕地整理の促進などに功績をあげる。一方で鶴岡を中心とする歌会を主宰して後進を指導する。

昭和三十四年

鶴岡市立図書館ではその文名を後世に残すため、短歌作品募集の「上野甚作賞」を制定し現在にいたる。

さらに郷土文学や郷土史研究のうえで